



# 鵜 戸

発行者兼編集者  
 鵜 戸 神 宮  
 社 務 所  
 印刷所  
 西 日 本 印 刷

ご あ い さ つ

宮 司 佐 師 朝 規

## 暑中御見舞 申し上げます。



暑さ殊に酷しき折柄皆様方には益々  
 ご健勝の御事と御慶び申し上げます。

本年は当神宮にゆかりのあるシャン  
 シャン馬道中唄全国大会、並にシャン  
 シャン馬道中を再現する会が発足され  
 てより第十回の節目を迎える事となり

ました。此の行事は旧暦三月、日南海岸七浦七峠から宮崎街道にかけて  
 盛装の花嫁を馬に乗せ花婿が、手綱を引いて鈴もシャンシャンと音も軽  
 く鵜戸の社へ宮詣りしたもので、花婿花嫁の当時の晴れの新婚旅行であ  
 った。本年も此の道中唄には全国各地から五百五十八人の参加者を数え  
 た。

又、シャンシャン馬道中を再現する会も全国から花嫁花婿の申込を受  
 け、其の内から三組が選ばれ花嫁姿で神宮に参拝され盛大に開催されま  
 した。

尚神宮は境内の整備も順調に進み境内社の稲荷神社をはじめ祭器庫・  
 守札庫の修復塗装も完成する事が出来、愈々御本殿の改築工事も市や県  
 の御指導を仰ぎ着工する予定で準備を進めております。

これもひとえに関係者皆様方の御支援によるものと厚くお礼申し上げ  
 ると共に、一層の御力添賜ります様御願ひ申し上げます。

未未筆ながら皆様方の御繁栄と御多幸を御祈念申し上げ御挨拶と致し  
 ます。



例祭齋行 奉祝行事



二月一日午前十一時より 献幣使塚塚武之進氏(県神社庁副庁長) 御参向の下、当神宮例祭が厳肅且つ盛大裡に斎行された。

当日は好天に恵まれ、責任役員、氏子・崇敬者総代を始め、四神宮(英彦山・霧島・鹿兒島・宮崎)の各宮司、県内外神社、官公衛関係、日南市・北郷町・南郷町の各地区々長、全国各地の崇敬者等多数の参列を賜った。

祭典には、当宮職員による舞楽「蘭陵王」が奉納され、厳肅な中にも華やかさもそえられた。

奉祝行事として儀式殿前広場にて、第二十四回鵜戸神宮奉納四半的弓道大会が開催され、七十七チーム・二四九名が参加し競技が行われた。

又、二月四日の日曜日には、第四十三回剣法発祥鵜戸山顕彰剣道大会が開催され一三〇チーム・約一二〇〇名の参加があり、終日熱戦が繰り広げられた。

尚、四半的大会・剣道大会の成績は次の通りである

(敬称略)

〔四半的大会〕

〔団体〕

▽①串間B ②串間A ③田野

〔個人〕

▽男子 ①坂元利夫(高崎)

②深江照男(串間) ③水久

保利秋(都城) ④長友信一

(田野)

⑤後藤重光(都於郡) ⑥福

田広海(清武)

▽女子 ①柳ヤスエ(南郷)

②馬場セツミ(都城) ③竹

山アヤ子(服部道場) ④野

崎ハツ子(田野) ⑤別府と

さ枝(山ノ口) ⑥朝倉スガ

子(木城)

〔剣道大会〕

〔男子団体〕

▽一般 ①機動隊(宮崎) ②

九州電力宮崎(宮崎) ③宮

崎産業経営大学(宮崎) 宮

崎刑務所(宮崎)

▽高校 ①宮崎北高校A(宮

崎) ②宮崎北高校B(宮崎)

③延岡学園高校(延岡) 鵬

翔高校(宮崎)

▽中学 ①宮崎神武館(宮崎)

②延岡至誠館(延岡) ③広

瀬中学校(佐土原) 延岡佐

藤道場(延岡)

▽少年 ①神武館(宮崎) ②

稲門館(延岡) ③大東武道

(同) 永真館(小林)

〔女子個人〕

▽一般・高校 ①甲斐寿子

(宮崎) ②黒木優子(同) ③

西田純子(延岡) (同) 小山

田祥子(宮崎)

▽中学 ①田口佳代(宮崎)

②椎葉ひとみ(西都) ③田

上加奈(延岡) (同) 指宿加

代子(小林)

▽小六 ①河野美久(串間)

②中谷優子(延岡) ③三雲

千裕(延岡) (同) 内門美由

記(同)

▽小五 ①領家麻奈美(都城)

②杉村奈保子(同) ③隈元

友里恵(三股) (同) 長友里

美(宮崎)

▽小四 ①長友香織(高岡)

②長野裕美(宮崎) ③藤木

千春(宮崎) (同) 中島千晴

(都城)



祈年祭齋行

二月十七日午前十一時より宮司以下祭員により祈年祭が厳肅に斎行された。

この祭は、五穀豊穡と国家の安泰を祈願する祭であり、農耕を主としてきた日本人にとって古代より行われてきた重要な祭である。

尚当日は、責任役員を始め、氏子崇敬者総代、官公庁、各地区々長、敬神婦人会等多数の参列を賜った。



別当宮司先賢 慰霊祭

五月十八日午前十一時より、歴代別当宮司遺族を始め多数の参列者のもと、しめやかに斎行された。

同祭は、当宮特殊神事の一つとされ、古例により現在も神仏合同の慰霊祭として執り行われている。

宮司祝詞奏上の後、潮満寺住職伊勢木俊真氏外僧侶二名により経が奏上された後、御詠歌などの法要が行われた。

第十回シャンシャン馬道中唄全国大会 開催とシャンシャン馬道中再現

今や全国的に愛唱されているシャンシャン馬道中唄の全国大会が、去る三月二十三日・二十四日の両日にわたり開催された。

二十三日は、日南市文化センターで予選が行なわれ県内外より合わせて五五八名が参加、少年・青年・壮年・実年・高年の五部門に分かれ決勝進出を競いあった。

二十四日は、会場を当神宮儀式殿に移し、決勝戦が行なわれた。

参加者は三味線・尺八・太鼓などの音に合わせて熱唱し、日頃鍛えた自慢の喉を披露した。

会場は民謡愛好家や一般参拝者で埋まり、唄の終るたびに大きな拍手が送られていた。

各部門の入賞者は次の通り。(敬称略)

- ▽少年の部 ①小淵愛子(宮崎市) ②浜地涼子(日南市) ③林美智子(南郷町)
▽青年の部 ①久嶋めぐみ



- (日南市) ②石川リノ(福岡県) ③那須記男(日向市)
▽壮年の部 ①稲用敦子(宮崎市) ②市来美年子(鹿兒島県) ③浜砂重子(西都市)
▽実年の部 ①米良節子(宮崎市) ②横山栄子(高鍋町) ③太田原アサエ(宮崎市)
▽高年の部 ①横山登美子(西都市) ②柳田成美(北郷村) ③山本忠臣(大分県)
又、同大会に合わせて「シャンシャン馬道中を再現する会」主催による鵜戸さ

ん詣りも行なわれ、県内外多数の応募者の中から、宇野敏彦・真理子さん(岐阜県)、小植有仁・奈津子さん(福岡県)、岩元育朗・美和子さん(鹿兒島県)の三組の新婚さんが選ばれ、花嫁の乗った馬の手綱を花婿が引いて境内を一周した後本殿にて正式参拝を行った。
又、「シャンシャン馬道中唄全国大会」の会場にも披露され、しばし、和やかな雰囲気にも包まれていた。



# 鵜戸・剣法（剣道） 発祥の地 その①

第十代崇神天皇の御代に天社国社神地神戸の制が定められ、諸国の神社が創建されたが、鵜戸神宮も古記によるとこの折りの創祀と伝えられている。又一説には景行天皇の御代の創建とも伝えられている。

鵜戸神宮は古来、航海、安産、育児の御神護の篤い神様として信仰されていて参拝者は絶えることがない。今日も参拝者は年々増加し霊験いよいよあらたかである。今年もすでに百万人を越え、外国人も特に中国、韓国、東南アジア系の人の参拝が多くなりました。

鵜戸神宮に参籠し靈験を蒙った例に多々あるが、この霊屈に籠り神示を受け剣の奥義を感得した人に僧の慈恩がいる。この慈恩は相馬四郎義元とって、正平六年奥州相馬に生まれたという。足利時代の初期に諸国を修行して巡り、鵜戸の

岩窟で剣法を覚り、一流を創めて念流と名づけた。

神宮は旧称を鵜戸六杜権権現又は鵜戸六幣権現、鵜戸山大権現とっていた。人皇第五十代桓武天皇の御宇に天台宗の僧、光喜坊快久が勅命を蒙って延暦元年秋に神殿三字を再興し寺院を建立し、勅号を鵜戸山大権現吾平山仁王護國寺と賜ったという。

慈恩はこの神社、仁王護寺と同宗の相州鎌倉の地福寺に入り慈恩（慈音）と申した。應永十五年五月信州は波合という所に至り、長福寺を建立し摩利支天を安置し御本尊をして、自らは念大和尚と称したと云われている。この長福寺は今も寺の跡だけを残すのみと聞いている。

系図  
念流（相馬四郎義元）中条流・富田流・一刀流・長谷川流  
尚茲恩より後に鵜戸の岩

窟で陰流の奥義を感得し世に劍聖と謳われた人に愛州移香がいる。

武藝小傳正徳四年日夏繁高著に或説に新陰流は昔慈音と云僧有、此僧九州の鵜戸の岩屋に於いて霊夢を蒙り陰流を始め、上泉此傳を得たりと、此説非なり、慈音は富田流の祖にして新陰流の祖にはあらず、しかれども似たることあり、愛州惟孝九州鵜戸岩屋にて刀術を自得す。慈音も亦鵜戸の岩屋にて精妙をさとる。其霊夢を蒙る所、共に鵜戸の岩屋なれば惟孝を不知者慈音を陰流の祖とあやまるならんとある。

移香（惟孝）は享徳元年（一四五二年）に生まれ青年時代を三重県会郡南勢五ヶ所で過ごし三十代で諸国を修行し鵜戸の岩窟で参籠し陰流を感得した。現在五ヶ所では六〇〇年前の南北朝時代に南朝方の忠臣として活躍した。天正四年（一五七六年）織田の一族北畠信雄によって絶滅された。この愛州氏の五ヶ所城跡があり、この城は建

武（一三三四年）頃に築かれたもので、中世の城で石垣はなく山を切り取ったようなもので戦時の砦と普通の家の跡がはつきりと別れ大変貴重な城で、城跡には五ヶ所川が蛇行し、天然の要塞となっていて専門家もうなずくものがあるという。

異稱日本傳卷中元禄元年九月松下見林薯を見ると武備志卷八十六 陳練制練数藝  
防風茅元儀輯刀  
茅子日、武經總要所載刀凡八種、而小異者猶不列焉、其習法皆不傳、今所習惟長刀、腰刀、腰刀則倭奴所習、世宗時進犯東南、故始得之、戚少保於辛酉陣上得其習法、又從而演之、並載於後、此法未傳、時所用刀制略同、但短而重、可廢也。今按、戚少保戚繼光、辛酉西明嘉靖四十年、當日本正親町天皇永祿四年、影流日本劍術流名也影當作陰、凡日本自古雖多敦劔者源義經稱絶軌、鞍間寺有僧正谷、寂寞無人之境也、昔權僧正壹演嘗修行佛道于此、故名僧正谷

鵜戸神宮八平安時代の初二勅号ヲ鵜戸山大権現仁王護國寺ト賜ワリ兩部神道ノ大道場デアッタ此ノ恕濤敵

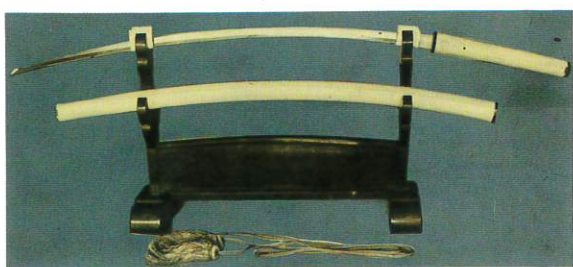
# 鵜戸

不祥、一條兼良著）に日州直申位西南故猿神現形示天孫土著之地とあり、日向は猿神には古くより因縁の地である。

平澤家伝記には、久忠三十六歳長亨二年戊申日州鵜戸ノ石籠ニ於テ書スル所ノ一軸ニ日ク、日州於宮崎郡愛州久忠三十六歳謹書（前略）忠久幼稚日起居動靜願修此法以向天黙禱矣或尋於千里忘旅程遠或祝君於君萬代願國家安仰敷多師窮諸玄辨矣君子不耻下問斯之謂歟三十有餘歲到日向國鵜戸岩屋於神殿焼頭香以深禱之三七日之曉燈影明滅四無人聲蜘蛛下在面欲除の其形片々不得樞之譜之彌堅仰之彌高在前忽然在後矣於此得此術嗚呼奇哉怪哉蜘蛛忽化老翁謂日爾他日偏願辨術其丹誠匪淺因授此術莫敢容易問奈其名何答日號陰流所謂日域無比倫以之號之。

は移香（彌子小七郎宗通が、常陸の太守佐竹義重に仕えた功により、常陸西那珂郡平沢村の地を賜い地名を以って姓としたのである。該伝記には、第一世久忠傳記、愛洲太郎左衛門尉、日向守、傳て日亨徳元年壬申に生ず、天文七年戊戌卒す。年八十七、法名移香齋。家傳に日、村上源氏北畠氏の苗裔にして世々伊勢國に住す。足利幕府十餘世に垂んとして吾朝既に干戈を諍て止す、國として未だ一日も穩かならず、久忠戦國の間に稟性で嘗て刀法を能す、故に武者修行を以て業とし自専ま、に諸國を経歴し終に采色を日向國宮崎の郡に食と云。とあり、宮崎郡の人であったことが記してある。当時宮崎郡に愛洲氏がいたことは、古文書からも明瞭である。

中でも足利時代に剣法の達人と謳われた。相馬四郎義元（慈音）及び愛洲移香が御神示により剣法の奥義悟った前者は「念流」後者は「陰流」を創始したと伝えられているこの二人をたたえ入口に剣法発祥の碑が建立されている。



鵜の丸の太刀



神威ニ解レテ士魂ヲ固メタサテモ劔ヲ撃ツ処足ハ大地ヲ踏ミ鳴ラシ声ハ御山ニ木霊シテ氣勢盛ンニ広大ナ神域ヲ庄シタ其ノ後鵜戸山ヲ源流トスル剣法ハ漸次諸國ニ拡ガリ様々ノ流派ヲ生ミ近世日本ノ剣道ヲシテ万葉ノ花ト栄エサセテ誠ニ剣法発祥ノ靈地ト讃仰サレタル所以デアアル茲ニ尊イ文化ノ跡ヲ顕影シ此ノ碑ヲ建立スルモノデアアル。

後学北辰一刀流  
松野義慶勲書  
とある。



藤之原一明	水野 孝一	廣 和典
相馬 治郎	村松 達雄	佐藤 章
早田 昭利	赤井 義正	中富 鐵也
蒲生 トヨ	林 千代	藤本孝太郎
大崎マル子	和田 昭夫	延原 久雄
林 宸三	宮本千恵子	今西 馨
稲吉 武男	金丸金一郎	脇元 実
小澤 光雄	松本 豪	中村 弘人
佐々木スナ子	米山 桂八	黒澤 博
吉開 進	細山田惟精	藤田サワ子
大賀 美治	飯田 英夫	神宮寺 剛
久保 重信	新名 明夫	神宮寺ミサ子
(有)阿部土建	加藤 重徳	宮野 正子
末安 宏國	田平 寿臣	中田 健
中村 輝久	山崎 裕加	桑田セツ子
佐藤 光吉	常政 繁夫	川瀬 光夫
石井 照男	江崎 益雄	南 正人
濱崎幸一郎	西澤 幸治	南 キクエ
市野 弘之	榎田 勇	南 益美
小原 一斗	河西 行雄	洞田 正勝
花岡 仁	前田 かな	榊原 英夫
田中 菊治	中村 幸	江村佐和子
田村 宗之	林 平八	佐藤 康子
作間 照夫	永井 一	浜田 保行
小林健三郎	落合 美保	松浦とみ子
釘元 俊男	安田 隆穂	松浦賀那子
小野田電氣(事補)	吉田 雄一	瓜生 浅美
中上 光雄	久田見正之	瓜生美和子
石田 達雄	渡辺多喜男	竹下 清
飯島 史教	永田 宣行	
山本 栄次	永田美佐子	
佐藤 道雄	木戸 和彦	
平村 修實	稲田 道敏	



彦火々出見尊は、釣針を失われ、塩土翁の教えのまま海神国へ行き、豊玉姫と契りを結ばれた。豊玉姫は鵜戸の岩屋にて御子(鵜草葺不合尊)をお産みになられた。しかし、決して産屋を覗かぬようと請われたが、尊は好奇心からそつと産屋を覗かれる。姫は八尋大鰐となつておられたという。姫は深くこれを恥じて海神国に帰られた。尊は姫の帰られたことに心を傷めて、

当宮縁りの御歌

おきつとり  
かもどくしまに  
わがいねし  
いもはわすれじ  
よのことごとくに

きみがよそひし  
たふとくありけり

と歌われた。又、一書には姫は御子を抱いて一度は海上に出られたが、天孫の御胤を海中に置き奉るべきではないと、妹玉依姫に送らせたとおっしゃられている。

当宮に縁りのある歌を今後も御紹介していきます。

あかだまは  
をさへひかれど  
しらたまの



安産御札

銅板奉納ご芳名

本殿御屋根は、塩害等の被害による損傷も著しく葺替を計画し、皆様方の御協賛をお願い申し上げます。

尚、平成七年十二月より平成八年五月までに御協賛を頂きました方々は以下の通りです。

米山 秀一	竹下くに子	佐竹 吉廣
米山知都子	高橋新三郎	中野 陸雄
加藤 保雄	高橋 久子	小島あや子
加藤美代子	高畑 理人	松村 吉一
坂口千鶴子	日高 輝雄	大松 明
須田 信儀	日高 初子	緒方 敏男
長崎 寛城	佐藤 孝臣	安田 正敏
佐々木教子	池尻 英一	鈴木文四郎
坪坂 雄仁	池尻由美子	榊原 照夫
坪坂美恵子	小路 磐岳	茶谷 恵一
北里 剛	今川 堯	野邊 康治
関口 重幸	川島 人治	林 春子
太田 静子	川島リヨ子	清水いづみ
原 稲人	中谷 淳	三輪 工
児玉 秀子	立川 善則	清水いづみ
佐藤 来	前田 和美	中野 一美
中嶋サタ子	菅原 宣彦	仁志 秀夫
青山 英子	白木 陽一	雨塚 悟
森 かおり	鹿島 健志	伊藤 政男
		小山 正
		高橋のぶ子
		高橋 イノ
		大山 トク
		菊本 良文
		菊本 マスエ
		外尾 綾
		坂元ナリ子
		笠井キヨ子
		前田 保徳
		森 栄子
		田中 義雄
		松枝 寅夫
		松枝 宏子
		田代 康夫
		岡崎 肇
		酒井 徹
		佐藤 一義
		平川 秋男
		斎藤 勲
		堀木 栄治
		柴田 脩藏
		安斉 茂之
		桑原 一喜
		松尾 昇三
		佐々木重雄
		横山 豊
		荒衛 重夫
		吉田 仁子
		湯屋 睦夫
		前野永美子
		片岡 通夫
		大原 清春
		大原 清弘
		鈴木登志也
		久保田忠治
		小美野清司
		川根 進
		根井 浩
		土居 芳久
		井上 哲也
		井上 照也
		浅田 十力
		宮沢 マス子
		鎌塚 良夫
		福川 祐吉
		太田 安吉
		中島 リツ
		山菅 ヨシ
		関口 フク
		山口 武宏
		田所 稔
		根本 静男
		秋谷 守
		根本 博光
		鈴木 好治
		岩崎 四郎
		崎村 幸男
		宮本 啓典
		永末 育夫
		藤野 晴允
		東谷 重男
		小島 寿雄
		今村 康成
		富岡 蔚
		庄 美智子
		木内山トヨ子
		山崎源三郎
		大平 敏夫
		皆川 治
		中野 直紀
		和泉 充
		岡田 昭彦
		高橋要四美
		松井 春子
		大場 勲
		菱田 寿郎
		江原 康子
		浜田 敏治
		多田 勝利
		黒木登志子
		川上 良一
		三宮 勝治
		工藤 勇助
		志賀由己浩
		廣川 俊二
		松田 芳治
		染矢 悦子
		大村 實
		鎌倉 正俊
		寺田 正博
		秋澤 芳郎
		坂井田京一
		田元 清悟
		田元 崇真子
		坂倉 正
		榊原茂三郎
		衛藤 美佳
		永野百合子
		田代 昭儀
		佐藤 宏仁
		川越 良行
		黒木 穰二
		倉嶋 照寿
		高 錫民
		清水 政代
		福元 勝己
		内田 隆
		吉田タツミ
		岩佐 光二
		花田 幸三
		萩原 隆夫
		鳥越 善政
		保住 好一
		西岡 輝雄
		吉田 柴一
		諏佐道太郎
		橋口 俊一
		国井 幹弘
		増田真一郎
		清水 秀子
		柴崎 正信
		渡辺 礼一
		若松 一枝
		重豊 健志
		鈴木 愛子
		荻田フキ子
		西村 治宏
		加藤 和郎
		大橋 眞澄
		斉藤 順子
		平山 邦彦
		陳 健振
		平野 茂郎
		広実 章
		山本 英然
		(株)西脇製作所
		西脇 誠子
		西脇 昭夫
		二階堂 有
		川口 登
		和田久美子
		増澤恵美子
		二宮 和史
		有川 清海
		桑原 博和
		永留 博文
		弓削 正文
		世良 滋則
		大寺留美子
		中村二三子
		笹平 克己
		北岡 實
		湯地賢三郎
		河野 隆
		浅香 治
		原 竹男
		谷内 涉
		高田昭三郎
		鈴木 幸一
		佐藤嬉余人
		糸岐嘉真子
		山本 正
		横尾賢太郎
		加藤 英夫
		小川 キク
		赤間つるよ
		加藤 和子
		佐藤 貞明
		松島徳太郎
		大澤 勝子
		山下 スエ
		森井 正勝
		木戸 規子
		伊達 薫三
		日高 正光
		佐藤トミエ
		山田 久江
		半田 紀子
		三根 博
		末永 清
		錫谷 光男
		山崎 正義
		竹村 裕子
		石黒 一
		石橋 繁男
		後藤ユカリ
		村田 浩治
		境 静男
		水野 恵美
		右城 一
		亀井喜代秀
		村瀬 至圭
		柴田 敏美
		杉山 慶子
		宇栄原悦子
		松岡 孝男
		田中喜十郎
		久保田寛一
		山本 信雄
		尾堂 雅代
		橋本美恵子
		中尾 稀一
		藤原よしこ
		清土 弘子
		勝見 惇子
		大久保利男
		富田 良三
		宮本 健藏
		斉藤江美子
		宮川登志司



### 神事一覽表

- 七月一日 月次祭
- 七月五日 月縁日祭
- 七月十三日 昭和遷座記念祭
- 八月一日 月次祭
- 八月十日 縁日祭
- 九月一日 月次祭
- 九月三日 縁日祭
- 九月十五日 敬老祭
- 九月二十三日 秋分祭
- 十月一日 月次祭
- 十月九日 縁日祭
- 十月十三日 龍山神社遙拜式
- 十月十七日 神嘗祭当日祭
- 十月二十日 皇子神社例祭
- 十月二十七日 福智神社例祭
- 十一月一日 月次祭
- 十一月二日 縁日祭
- 十一月三日 明治祭
- 十一月七日 神御衣祭
- 十一月十五日 七五三祭
- 十一月十七日 儀式殿鎮座記念祭
- 十一月二十三日 新嘗祭(五穀豊穰感謝祭)

- 十一月二十四日 水神祭
- 十二月一日 月次祭
- 十二月三日 火産靈神社祭
- 十二月八日 縁日祭
- 十二月十五日 門守祭
- 十二月二十三日 天長祭
- 十二月二十七日 煤払祭
- 十二月三十一日 大祓式・除夜祭

### いさみ太鼓

### 奉納

五月五日のこどもの日。前日迄の雨が嘘のように晴れ上がり、五月晴れのなか揃いの鉢巻、法被姿の地元



の子供たち四十名が鵜戸の大神様と祖先の恩とに感謝すると共に、健やかなる成長を祈り御本殿・儀式殿前広場に於いて「いさみ太鼓」を奉納した。

いさみ太鼓は、昭和天皇御在位五十年を記念して創作されたものであり、当神宮下の磯に打ち寄せ砕け散る荒波の様子を太鼓・笛・鈴等で表現している。

この日はゴールデンウィーク期間中とあって参拝者も多く元気に太鼓を打つ子供達をさかんにカメラに収めていた。

### 責任役員

### 鬼束達朗氏

### 表彰される。

四月十七日、神社本庁に於いて、責任役員鬼束達朗氏が功労顕著な者として表彰された。これは永年の功績が認められたものであり、当宮としても大変光栄なことである。



### 新職員紹介

巫女 岩切和美  
生年月日

昭和五十二年十一月二十六日



巫女 崎村美奈子  
生年月日

昭和五十二年九月二十一日



### 辞令

主典 中原慎太郎  
鵜戸神宮権祿宜に任ずる  
神社本庁(三月二十一日)

斎女 榊田美智代

(同) 古澤みどり

(同) 嶋岡ひろみ

(同) 鈴木直美

願いに依り職を免ずる

(五月三十一日)